

# 性象徴の考古学

春 成 秀 爾

1 序説	4 ホト隠し
2 オハゼの造形品	5 交合の造形品
3 ホトの造形品	6 男と女の対立と和合

## 論文要旨

採集社会においては、勃起したオハゼ（男根）はそれだけで活力の象徴であり、農耕社会にいたると、男女の交合が豊穡を予祝するという信仰に変わるとする説がある。日本の旧石器時代から現代にいたるまでの、性象徴に関する考古・歴史・民俗資料を検討した結果は、次のとおりである。

日本列島では、オハゼをかたどった品の製作・使用は、旧石器時代後期の約2.4万年前に始まり、現代まで続いている。時代を問わず、勃起したオハゼを活力の象徴とみなす考えがあった。

それに対して、ホト（女陰）の造形品の製作は、縄文時代後・晩期の東北・関東地方にほとんど限られる。ホトは、文献史料には、オハゼを挿入する場所、ものを産み出す場所として、あるいは邪悪な男神の眼力を奪うものとしてでてくる。ホトは、活力を産み出す象徴、あるいは魔除けの象徴として存在したらしい。

その一方、男女交合の造形品は、縄文中期の北陸地方、後期の北海道・東北地方、晩期の東北・関東・中部・北陸地方に顕著に存在する。しかし、他の時期・地方には稀である。男女の交合を集団間の統合、集団内の結合の象徴とする思考が、妻方居住婚から夫方居住婚へと移行する縄文後・晩期の東日本に存在した。

弥生時代以降の農耕社会にいたっても、室町時代までは、オハゼ形の木製品は、活力の象徴または辟邪の呪具として用いており、農耕儀礼との直接的な結びつきを証明できない。平安時代初めの『古語拾遺』の記事は、農耕儀礼との関連を示唆するが、このばあいもオハゼ形を単独に用いており、交合が豊穡をもたらすという図式にはなっていない。男女交合またはその擬きを豊穡儀礼に取りこんだのは、近世以降の一部の地域に限られる。

オハゼ形を、それだけで交合の象徴とみなし、子を授けてくれる呪物とする信仰も、江戸時代を大きくさかのぼるものではないらしい。

性象徴が、社会の中で大きな比重を占めていたのは、縄文時代のことであって、弥生時代以降には、稲作儀礼あるいは律令祭祀に押されて、その残影として民間信仰化しながら今日まで残った、というのが日本の性象徴の社会史である。